

小学校の歴史既習事項を生かしたAL②

—時代の変化をとらえる学習の展開・「開国から明治維新へ」を事例に—

兵庫教育大学 教授 山内 敏男

1 はじめに

小学校の学習では、時代の変化をとらえる場合、「時代を変化させたのは誰か」、「どのように変化させたのか」、「どのような思いや願いに基づき政治を進めたのか」などの問いによって授業が展開されます。つまり、人物の行為から学習します。一方、中学校では「出来事はどのような影響を与えたのか」、「社会（政権）はどのように対応した（政策をとった）のか」など、社会や政治の動きから学習する原理となっています。組織や社会の動向から変化をとらえていくことから、人物との関連が把握しにくい点に留意が必要です。この点を踏まえ、今回は時代の変化をとらえることについて、開国から明治維新を事例に既習事項を生かした学習の提案をします。

2 授業の構成・展開

幕末から明治維新にかけては、人物と出来事とが容易に結びつかず、人物の属性（例えば幕府や雄藩のどこに所属しているのか）など、人物と社会との関係が複雑であるがゆえに分かりづらさが際立っています。加えて、その複雑さは歴史の流れ、つまり推移や変遷を単純な時系列で説明しづらいことにもなります。近代の学習では、この分かりづらさと説明しづらさを改善することが必要です。手立ての一つとしてあげるのは、**関連づけを繰り返す**ことです。

【活動1】既習事項と関連づける

開国について小学校では「1853年、ペリーが来航し開国を求め、翌年に日米和親条約を結んだ」こと、「1858年に日米修好通商条約を結んで外国との貿易が始まり鎖国の状態が終わった」ことが取り上げられています。『社会科 中

学生の歴史』（以下、教科書）では、開国を扱う前（p.160～161）に東アジアにおける外国船の度重なる来航、アヘン戦争の影響などが示されています。導入ではこれら既習事項を板書なりプレゼンテーションなりで示して確認します。同時に生徒は各自で（電子）ホワイトボードなどを用いて既習事項を時系列（縦軸）、地域別（横軸）に書き込んでいきます。年表風にまとめてもよいのですが、後で出来事に情報を付加していくことから、ウェビングマップ風に書き込んでいくことを提案します（図1）。

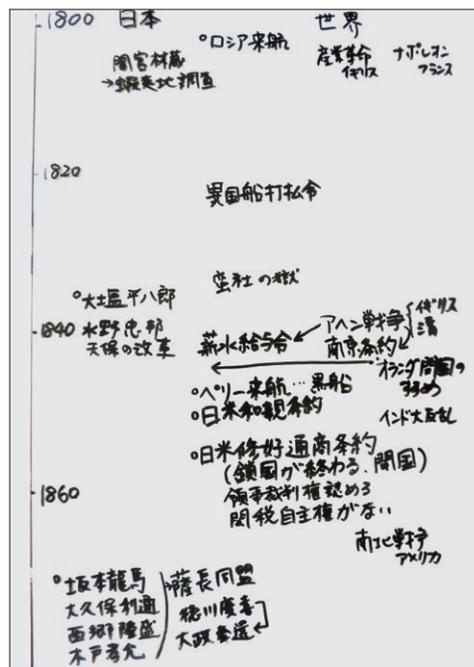


図1 生徒の既習事項の書き込み例
左端丸印は小学校で学習した出来事、人物

この活動でぜひ取り組みたいのは、**出来事と人物とを関連づけ、変化の過程として書き込んで位置づける**ことです。この書き込みにより、**出来事にかかわる人物、属性の状況が可視化**されます。このことは、授業者にとってもメリットがあります。既習事項と関連づけの書き込みから、小学校やクラスごとで何をどこまで学習

したのか、個人における定着度などを推し測ることができます（この段階での既有知識はそれぞれで異なることを前提としたいところです）。

【活動2】未習事項と関連づける

次に、既習事項と未習事項を関連づけ、同時期の世界の様子と、その前後における日本やアジアの動向へと視野を広げます。小学校の教科書、中学校の教科書p.164～165の記述を踏まえ、授業者が想定する未習事項を①国書を受け取った後の幕府の対応、②ペリーの来航でアメリカが開国を求めた理由とします。既有知識の程度が異なることを踏まえると、既習・未習であるかどうかの判断は生徒に委ねるとよいでしょう。図2のように未習事項は色を変えるよう指示することで、既習事項と未習事項にかかわる自己調整が期待できます。

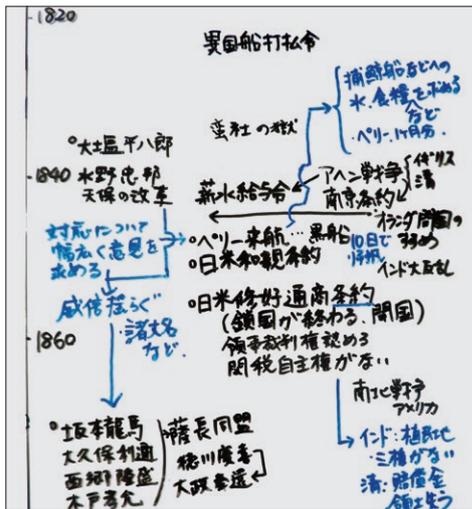


図2 生徒の未習事項の書き込み例（青字、部分）

①では、教科書p.164本文「幕府は初めて諸大名や下級の幕臣などに幅広く意見を求め、朝廷にも報告を行いました。天保の改革の失敗に加え、これまでにない対応をしたことで、幕府の威信は大きく揺らぎました」に着目します。諸大名などに相談することがなかった状況との差異を示し、「威信が揺らぐとどのような影響を及ぼすか」の問いにより、生徒は幕藩体制が変化の兆しを見せたことをとらえられるでしょう。

②では、アメリカの貿易船や捕鯨船への水、食料の補給などのためだということを教科書p.164本文、コラム「地域史」から押さえます。そして1953年の浦賀来航時はなぜ10日間で帰帆したのかを問い、ペリーが置かれていた状況、

資料「ペリーの日記1853年7月16日」¹⁾

食料も水も十分ではなく、頑張っているのはせいぜい1カ月だった。（幕府が）時間稼ぎするのは簡単だし、結局何の成果も得られず出帆する羽目になるかもしれない。

条約締結に至る背景を把握します（資料）。なお、ペリーは、フィルモア大統領から「発砲厳禁」の命令を受けていました²⁾。宣戦布告は議会が行うとされ、勝手な交戦はできないことによるものです。戦争を前提としない来港であり、日米和親条約は日本に不利な条項があるものの従属を強いるものではなかったことから、幕府の交渉力とも関連づけることができるでしょう。

【活動3】明治政府による「近代化」への見通しをもつ（今後の学習と関連づける）

続いて、日米修好通商条約で貿易を始めたことにより物価高、金の流出が起き経済が混乱したこと（教科書p.165）を押さえ、活動1、2を踏まえ、その後の変化を問います。政治と経済の混乱による影響（幕府権威の低下、尊王攘夷論の高まりなど）を関連づけ、幕藩体制が置かれた状況を把握します。そして、欧米諸国と他のアジア諸国（植民地とされたインドや、アヘン戦争敗戦により賠償金と領土割譲を強いられた清）との関係を確認し、開国の際、日本がどのように欧米諸国と向き合ってきたのかをとらえます。最後に、こうした状況を前提とした「明治政府による『近代化』は何を目指そうとしたのか」を問うことで、次時以降の見通しをもたせる活動につなげることができます。

3 おわりに

既習事項に着目して関連づけを繰り返し、社会の状況と人物の行為を書き込むことで、時代の変化がより明確かつ多面的・多角的に導き出せます。その際、意見交流を行い、関連づけたことを紹介し合うことで、これまで気付かなかった関係を理解していくことができるでしょう。

〈引用文献〉

- 1) M・C・ペリー原著 木原悦子訳『ペリー提督日本遠征日記』小学館、1996年、p.78-79より一部要約、抜粋
- 2) 加藤祐三『幕末外交と開国』筑摩書房、2004年、p.67-69